Memoirs of Beppu University, 53 (2012)

大分県中津市方言の文末詞デ（－）のイントネーション
―高年層を中心に―

松　田　美　香

【要　　旨】

大分県中津市方言において使用されている文末詞デ（－）には、２種類の意味があるとされている。先行研究では、＜疑問＞のときは「軽く短く」、＜告知＞のときは「強く長く」発音されると報告されている。50年間の音声資料を音声分析した結果、＜疑問＞のときは下降調の、＜告知＞のときは非下降調のイントネーションで実現されていることがわかった。＜疑問＞文のイントネーションが下降調であるのは、鹿児島・熊本・長崎と同様である。

【キーワード】

方言、文末詞、デ（－）、下降調、イントネーション

０．はじめに

大分県中津市は、大分県の最北東部に位置し、福岡県に隣接する地域である。旧「豊前国」の一部であり、旧国としては福岡県域の方との共通性が見られる。平成17年３月の町村合併により市域が広がったが、右の調査地点図では旧市域を示している。本論では過去50年ほど遡った資料も使用することから、中津市の市域を昭和30年３月と同一の範囲として示す。

約55年前、同一の場面設定によって、県内各地での方言談話調査が行われた。ただし、NHK 大分放送局が大分のさまざまな地域とその方言を紹介するためのラジオ番組作りを主とするものであった。その30年後には、第１次調査地の中から24地点が再調査され、平成21～23年度には、科学研究費補助金を受けた研究として、第３次調査を行うに至った。

旧中津市（以降、中津市）は、第３次調査地にも選ばれ、平成22年２月に調査済みである。その結果は今後まとめら

図１　大分県旧市町村図
（旧中津市域は61番）
松田正義・日高貢一郎『大分方言30年の変容』(1996)明治書院より
●：Ｓ.30　調査地
◎：Ｓ.30, Ｓ.59調査地

れる予定である。筆者も調査に参加した際、この地域の文末詞デ（－）に強い関心を持った。
中津市方言の文末詞デ（－）は、２種類あると報告されている（おもに高年層）。

「オルデ（－）」　：いますか？
「オルデ（－）」　：いますよ。

敬語やイントネーションとの関わりも感じられるこの現象について、分析・解明してみたいと思う。言い換えれば、「文末詞デ（－）が文末イントネーションによって意味[1]の違いを持つ」という仮説を検証したいということである。
本稿の目的は、まず、「文末詞デ（－）は強さや長短によって意味が変わる」という先行研究を検証し、イントネーションとの関わりを明らかにすることである。
方法としては、過去の大分県方言調査の音声資料の中から文末詞デ(－)の出現する例を集め、その文末イントネーションを整理・分類しようと思う。

１．先行研究

松田正義（1960）[2]によると、下毛郡山国村溝部（現中津市山国町）では、「ソー１デ」（そうですか。１はアクセントの下がり目)、「アリャ　ガッコー　ジャローデ」（あれは学校でしょうよ）などの例があがっている。特に「です」の表現として、
　フヂャ　アルデ（筆はありますか）
　フジャ　アルデー（筆はありますよ）
どちらもが弱い敬意をあらわすこと、文末が「か」になる例と「よ」になる例が示されている。同書の大野郡緒方町長谷川[3]（現豊後大野市緒方町）の部分には、「ここではデを二様に使っています」という記述がある。23歳男性の「オナゴシデン　ドン１ドン　ノボラルル１デ（女のひとでもどんどん登られるよ)」のことばを受けて、「ソーデ↑（そうですか)」と返している。解説には、「『ソーデ』のデは疑問の助詞のややていねいな形ですが、土地の人の話では最近他の地域から伝染したことばだそうです。従って若い人だけが使っています」とある。脚注には県北で盛んだが、佐伯市でも使うので、この地は佐伯市の影響だろうとしている。
その後、九州方言研究会（1969）[4]の大分県長湯方言[5]には、以下のようなスクリプトが掲載されている。

１．魚つり[6]
f　ドゲコト　シテ　タブルン？
　（どんなふうにして食べるの？）
m　ヤッパー　ヤイチ　ショーユー　カケタリ　テンプラニ　シタリスル。
　（やっぱり焼いて　しょう油を　かけたり　天ぷらに　　したりする。）
f　ホントデ？
　（そう？）
m　ウン。
　（うん。）

共通語訳や前後の文脈からも、疑問を表す助詞として「デ」が使われていると思われる。
一方、同書の熊本県深海方言[7]に「１終助詞1.3確述・念押し」として、「ヨケー　イルレバマタ　クサルッデ（余計に入れれば、また、腐れますよ。)」、「チッゴガワワ　オーキカカワ

ヂャッデナー（筑後川は大きな川ですよ！）」が示され、「ゾ・ジャーにくらべて、デには高い待遇度が認められる。（中略）デは、多くのばあい、ナーに先行して、デナーの形で用いられる」と解説されている。しかし、ここには疑問の「デ」の例はない。

時代が下り、大分方言の集大成として編まれた大分県（1991）[8]には、「『デ』は大分県下全般にさかんであり、いくぶんていねいな気もちが含まれる。多くは告知の用法であるが、問いやあいづちの例もある」として、「アン１タ　イカン１デー（あなたは行きませんか）。（中津市）」の例があがっている。

松田・日高（1996）[9]は、大分方言の談話を録り、NHK の番組として放送した内容をまとめたものである。同著の中で、アナウンサーの「しかし、疑問か断定か区別がつきにくい場合もありそうですね。」に対し、松田正義が「疑問の時は「デ」を軽く短く発音します。これに対して断定の場合は「で」を長く強く発音して（330p.）」と、音声特徴の違いを答えている。

大家（2003）[10]は研究書ではないが、この違いについて「『デ』は、時・場により、疑問・肯定に使う」としている。

以上の先行研究から、大分方言には少なくとも＜告知＞と＜疑問＞の２種類の意味[11]を表すデ（－）があり、熊本県では高い待遇度を持つ文末詞として使われていることがわかる。また、県北の中津市では方言として、県中央部の長湯では当時の若年層しか使わない新しい方言としての認識があったようだ。アクセントかイントネーションかは判然としないが、小野（1991）などによって、＜疑問＞の場合はデが低くなることが示されている。

その後の、この現象についての調査・研究は管見の限りでは見つからなかった。

意味の分類では、＜告知＞＜断定＞＜肯定＞があり、熊本県の場合には「確述・念押し」とあるが、それらの機能をまとめた意味の＜告知＞で代表させる。一方、＜疑問＞は「話し手は確たる内容を持っておらず、それを聞き手に問う」機能として使われていると解釈できる。

したがって＜疑問・問い掛け＞としたいところが、冗長なので＜疑問＞とする。さらに「敬意」という点については、後述する。

本稿では、意味の分類と実際の音声資料でわかる文末イントネーションとを突き合わせてみる。

その結果、デ（－）の意味の違いをイントネーションが担っていることを明らかにしたい。

２．文末詞デ（－）のイントネーション（調査結果）

２－１．音声資料　―高年層を中心に―

（１）昭和30年調査　中津市北部　『方言生活30年の変容』上巻[12]
（２）昭和59年調査　中津市北部　『方言生活30年の変容』下巻[13]
（３）平成22年調査　中津市北部　科研「言語生活50年の変容」調査[14]

（１）と（２）は、NHK 主催で行われた談話調査。大分大学から方言研究者が同行し、進行役や文字化を行った。高年層、青年層、中学生の三世代がそれぞれ男女１人ずつでペアの会話を行う。場面別に１～２分程度収録。場面は、高年層が９、青年層が７、中学生が６である。

（１）は県内と周辺地域32地点。

（２）は、やはり NHK と大分大学の方言研究者が行った調査で、（１）と重複する24地点を調査したもの。

（３）は、NHK とは直接関係なく、科学研究費助成を受けた調査で、筆者を含めた九州の方言研究者４名で行ったもの。（１）・（２）と重複する12地点＋１地点（佐伯市）で行った。

したがって、同じ中津市北部地域について、56年前、27年前、現在の音声資料を観察できるわけである。（1）と（2）はNHKの録音したものがCDになっていたので、それを利用した。（3）は、PCMレコーダー[15]で録音をした後、CD化したものである。

２－２．文脈からの意味解釈とイントネーション

談話資料の利点は、ターゲットとする語句が単独で現れるのではなく、文脈の中でその意味や機能が理解できる点である。２－１.の資料から文末詞デ（－）の出てくる場所を探し、会話の文脈から文末詞デ（－）の意味を取り出した。それぞれに「SUGI Speech Analyzer V2.1」という音声分析ソフトを使って出した「ピッチ曲線」を付ける。ピッチとは音の高低のことであり、日本語の高低アクセントとイントネーションの両方がピッチで表される。そのため、デ（－）のアクセントと文末イントネーションの両方が作用した結果を観察しながら、意味との関係を探っていくことになる。

例１　昭和30年調査から＜疑問＞（ｍ：男性　当時75歳、ｆ：女性　当時54歳）
　　高年　朝[16]（□は筆者が付けた）

ｍ１　アン　スマンガ　アンタカタン　ウメンハナー　イッポン　キラシチ
　　あの　すまないが　お宅の　　梅の花を　　一本　　切らして

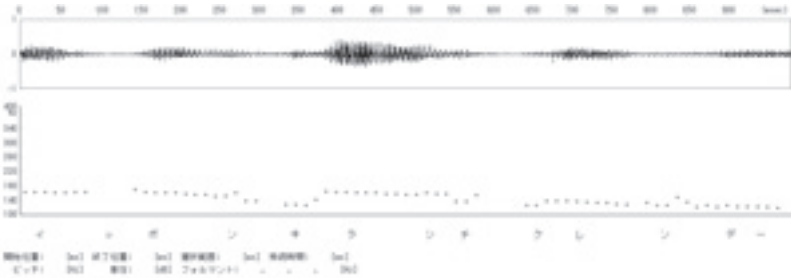
　　クレン［デー］。
　　くれません［かな］。

　　（ｆ１　アー）ホトイサマイ　アギュートモーチ　オモーチョルキー。
　　（　　ああ）仏様に　　あげようと（思って）思っているから。

ｆ２　アー　ソリャー　ココロヤシー　コッチャ。
　　ああ、それは　おやすい　　事じゃ。

ピッチ曲線を使ってイントネーションを見てみよう。

例１（Ｓ.30高年男性・疑問）のピッチ曲線　「一本切らせてくれないか」



全体的にゆるやかな下降をしているように見える。デーは低く発音されている。スクリプトを見ると、ｍ１の発話「キラシチ　クレンデー。」の後すぐに、ｆ１の「アー」という応答が入っている。さらにｆ２でも「それはおやすい事だ」という応答が加えられていることから、ｍ１の「クレンデー」が「くれないか」にあたり、デーが疑問を表す文末詞であることがわかる。

例２　昭和30年調査から＜告知＞（m：男性　当時75歳、ｆ：女性　当時54歳）
　　高年　朝の続き

ｍ１　アンタカタ　　イランカ　アンタナー。　マー　ツイデニ　キローカ。
　　あなたの家（は）　いらないかね　あなたねえ。まあ　ついでに　切ろうか。

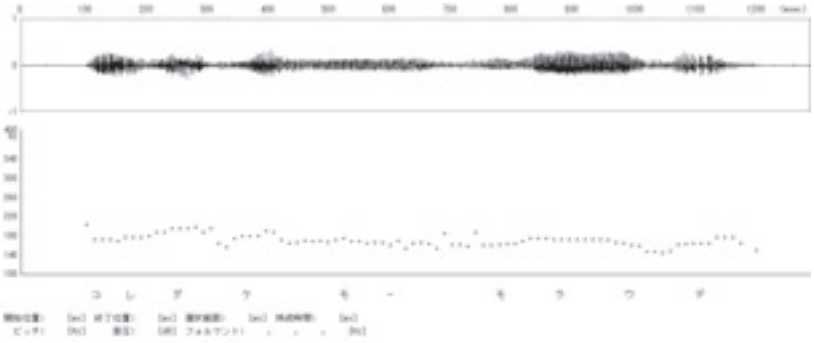
ｆ１　アー　ティーディ　キッチョイチェ　オクレ。
　　ああ　ついでに　切っておいて　ください。

ｍ２　エー、　フナラー　コリダケ　モー　モラウ デ。　アリガトー　ゴザイマス
　　ええ、　じゃ　これだけ　もう　もらい ますよ 。　ありがとう　ございます

　　オーキニ。
　　大変に。

会話はここで終了している（ｆの応答は必要ない）ので、ｍ２の「モラウデ」は「もらう」ということを＜告知＞していると解釈される。

例２（Ｓ.30高年男性・告知）のピッチ曲線



デの拍内で上昇し、その後自然下降しているように観察される。

例３　昭和30年調査から＜疑問＞（m：男性　当時30歳、f：女性　当時25歳）
　　自由２　嫁入りなど

ｍ１　アッ　ソッデ　アン　アサッテナー、（ｆ　ウン）シェイネンダンノジョーデ
　　あっ　それで　あの　あさってね、　（ｆ　うん）青年団の連中で

　　アン　トーバルン　　ウメミニ　イクノンジャラ。
　　（あの）　唐原の　　梅見に　　行くんだよ。

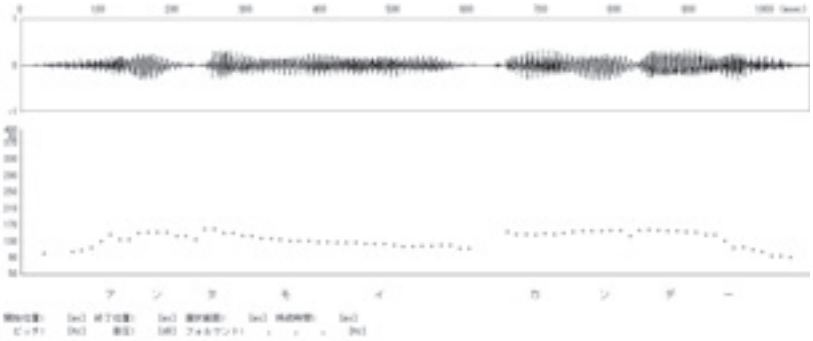
ｆ１　ア　　ソーデ。
　　あら　そうなの。

ｍ２　アンタモ　イカン デ 。
　　あなたも　行かない か 。

ｆ２　イキテーナー。
　　行きたいなあ。

ｆ２の応答から、ｍ２が誘いのことばであることが分かる。「行かないか？」という「否定疑問」の形である。このデ（－）のイントネーションを見てみよう。

例３－ｍ２（Ｓ.30壮年男性・疑問）のピッチ曲線



デーと長く引き伸ばされていることと、デーが次第に下降していることがわかる。

例４　昭和59年調査から＜告知＞＜疑問＞（ｍ：男性　当時77歳、ｆ：女性　当時80歳）

　　高年　買い物
ｆ１　チョット　ソーン　ナンカ　オチャガーシ　スコーシ　オクレ。
　　ちょっと　その　何か　お茶菓子　少し　おくれ。

ｍ１　オコッ　オチャガシ、　ハーイ　（ｆ　ハーイ）　コル　モッテイキナハーイ、
　　お茶菓子、　はい　（ｆ　はい）　これを　持って行きなさい、

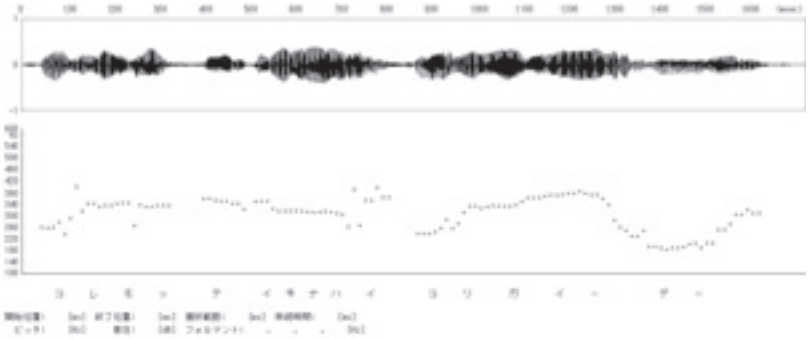
　コリガ　イー デー 。
　これが　いい （です）よ 。

ｆ２　ソラ　ナーン デ　ソラ。
　それは　何 （ですか） それは。

ｍ２　コリャ　アーン　ヨーカンジャロ　アンタ。(中略)
これは　あの　羊羹だよ　（あんた）

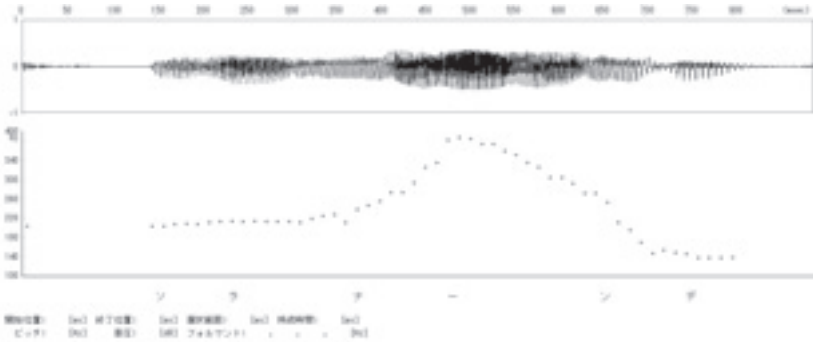
デ（－）が、短い会話の中に２つ出現した例である。疑問の方は疑問詞「ナーン（何)」が付いている。それぞれのイントネーションを見てみよう。

例４－ｍ１（Ｓ.59高年男性・告知）のピッチ曲線



デが始まりから大きく上昇している。

例４－ｆ２（Ｓ.59高年女性・疑問）のピッチ曲線



疑問詞「何（ナーン）」の部分で急激に上昇下降し、デは低く抑えられたような形で接続している。

例５　平成22年調査から＜疑問＞（ｍ：男性　当時82歳、ｆ：女性　当時81歳）
　　高年　自由会話（お雛祭り）

ｍ１　アー　アンタ、　ナン デ 、ドコエ　イキヨッ デ ？
　　ああ　あなた、　何 ですか 、どこへ　行っているの ですか ？

ｆ１　ウチャー　アンタ、　オヒナサマ　ミニ　イキヨンノンジャラ。
　　私は　　あなた、　お雛様　　見に　行っているのですよ。
　　（中略）

ｆ２　ソーカナー。　ケド、　ヤッパリナー、　オンナノコノナー　　オヒナマツリダケワ
　　そうかな。　けれど、やっぱりねぇ、　女の子のねぇ　　お雛祭りだけは

　　モー　ワタシワ　ホント　ナカツワ　ナンジューネンモ　ツヅイテ、マ　コンナ
　　もう　私は　　本当　　中津は　　何十年も　　続いて、　ま　こんな

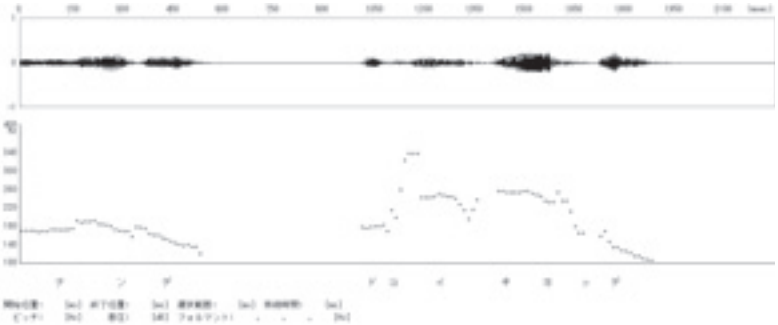
　　ウレシーコターネー デー 。

嬉しいことはない ［ですよ］。
（中略）
ｍ２　ンナ　　マタ　アウ ［デー］。
それなら　また　会い ［ますよ］。

ｆ３　オー、ホンナ　　アンタ　キオツケチ　カエンナイナー。
おお、それなら　あなた　気をつけて　帰りなさいねぇ。

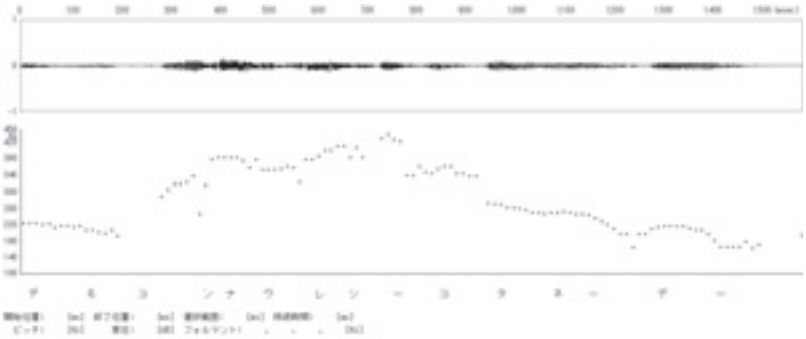
ｍ１が「何か」、「どこへ行くか」と疑問を投げかけている。ｆ１はそれに答えて「お雛様を見に行っている」という返事をしている。「何」「どこ」という疑問詞が共起している。次のｍ２は別れの挨拶である。したがって、その一つ前の発話ｆ２は疑問（問いかけ）ではなく、「雛祭りが続いていることが嬉しい」という心情を伝えているのだということがわかる。ｍ２の発話も、ｆ３が疑問に対する答えではないことから、近いうちにまた会うことを伝えているのであることがわかる。ｍ１から順次イントネーションを見てみよう。

例５－ｍ１（H.22高年男性・疑問）のピッチ曲線



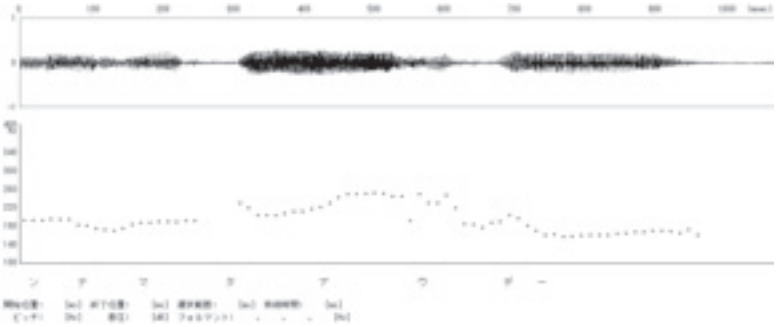
どちらも下降調である。特に、後の方はデの拍内でのかなり急激な下降が見られる。実際のデの音声もかなり低く感じられる。

例５－ｆ２（H.22高年女性・告知）のピッチ曲線



直前に下降しているピッチが、デの始まりとともにやや上昇し、その後下降している。
音声は、上昇下降しながら引き伸ばされていることもあり、ひときわ特徴的である。

例５－ｍ２（H.22高年男性・告知）のピッチ曲線



ｆ２に比べると上昇の時間も規模も小さいが、デの拍内で一度上昇し、その後は下がり止まったまま引き伸ばされている。

２－３．年代差

昭和30・59年調査までは、＜疑問＞の文末詞デ（－）が全年代に観察される。しかし、H.22調査では高年層のみに観察され、他年代ではまったく観察されなかった。断言することはできないが、現代の中津市方言では、若い年代に＜疑問＞のデ（－）は伝わっていないのではないかと思われる。これを明らかにするためには、アンケート等によるさらに細かく分けた年代別調査や聞き取り調査が必要である。

２－４．文末詞デ（－）の意味とイントネーションの実態

２－１．に示した（１）～（３）の資料にあたり、文脈から意味が特定できる文末詞デ（－）の音声を聞いて記録した。なんらかの理由で上昇や下降が判断できないときは、そのまま「不明」とした。

表１　文末詞デ(－)の意味とイントネーションの実態表

	＜疑問＞		＜告知＞	
（１）S.30調査	上昇調	０例	上昇調	**11例**
	下降調	**10例**	下降調	２例（～否定形＋－デ）
	平調	１例	平調	１例（高平板）
	不明	０例	不明	２例（声の重なり）
（２）S.59調査	上昇調	１例（中学生）	上昇調	**4例**
	下降調	**15例**	下降調	０例
	平調	１例（低平板）	平調	０例
	不明	０例	不明	１例（声の重なり）
（３）H.22調査	上昇調	０例	上昇	**6例**
	下降調	**8例**	下降調	２例（１例は上昇下降）
	平調	２例（１例は低平板）	平調	**6例（うち２例は高平板）**
	不明	０例	不明	０例

なお、相手の発言を受ける「ソーデー」が多数観察されたが、そのイントネーションはさまざまな実現形が表れた。「ソーデー」の意味がひとつではない可能性があるため、今回は分析には加えなかった。

２－５．文末詞デ（ー）の意味とイントネーションの対応関係（各年の調査結果を総合したもの）

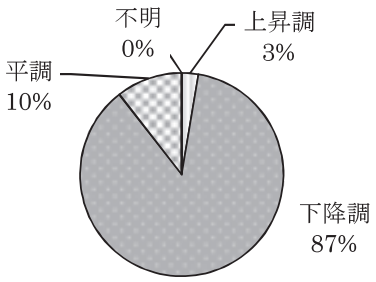


図２＜疑問＞のイントネーション

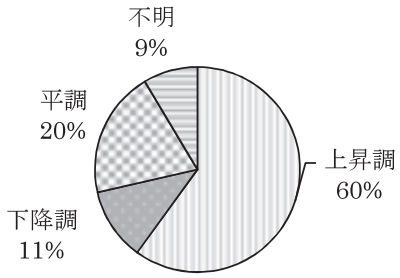


図３＜告知＞のイントネーション

図２と３から、文末詞デ（－）の意味が＜疑問＞である場合は、87％の割合で下降調で実現されていること、反対に＜告知＞である場合は、下降調は～ナイに下接する場合か、一度上昇してから下降するかで実現されるのを除けば、おおむね上昇調か平調で実現されていることがわかる。

２－６．調査結果のまとめ

以上の調査結果から、文末詞デ（－）のイントネーションとの関係をあらわすと、以下のようになる。

表２　文末詞デ（ー）の意味とイントネーションの関係

文末詞デ（－）の意味	イントネーションの種類	先行研究での表現
＜疑問＞	下降イントネーション	「軽く短く」
＜告知＞	非下降イントネーション （上昇調～平調）	「強く長く」

実際の音声を聞いてみると、意味によってデとデーが分かれているとの判断は下せない。デー（長音）になるのは、別の（例えば強調など）要素がかかわっているためと考えられる。

３．考察

３－１．＜疑問＞の場合

木部（2010）[17]では、「日本の中央部に質問文を上昇調で言う方言が分布し、東北、北陸、九州のような日本の周辺部に下降調で言う方言が分布していて、周圏論的分布の様相を呈している。（中略）中央からの伝播によって下降調が上昇調に変わる、というような単純な図式で解釈できない」とあり、日本国内には共通語（東京方言）と同じく質問文を上昇調で言う方言ばかりでなく、下降調で言う方言があることが書かれている。また、「鹿児島方言の質問文は下降調になるのが普通で、上昇調では丁寧、強い回答要求などの意味の加わった質問を表すというシステムをもっていることがわかる。」とある。

同論文では、質問（疑問）文のイントネーションに３タイプを上げ、鹿児島方言、熊本天草方

言、長崎方言などは「下降調タイプ」とされているが、大分方言の記述はない。

本調査の結果から、当該方言も「下降調タイプ」であると考えられる。質問（疑問）文を作る文末詞は、他にカエ（－）・エ（－）・ナ（－）などがあるが、デ（－）の場合が下降調であれば、まず間違いないと思われるからである。地理的に言っても、鹿児島県、熊本県、長崎県と同じタイプであっても不自然ではない。

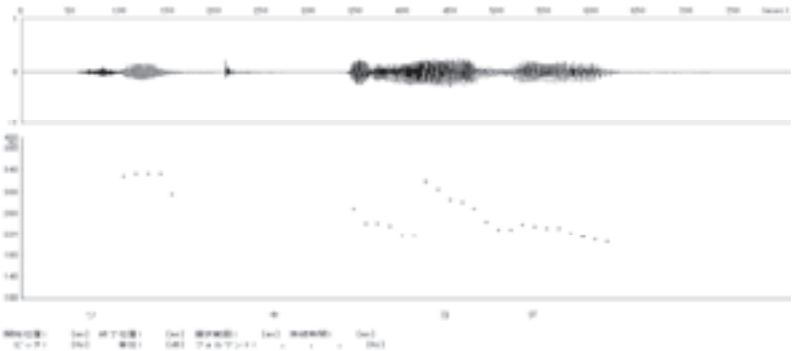
また、鹿児島方言の場合も「下降調になるのが普通」であって、丁寧さや強い質問要求の要素が加わると上昇調になるのであるから、今回の調査で上昇調になったのは、当時中学生の一例だけであるが、会話の内容の、相手の男子をからかうような調子との関係が考えられる。

鹿児島方言の質問文には文末詞が必須であり、それゆえにイントネーションの助け（上昇）が必要とされないようだが、当該方言はどうであろうか。時代が下るとともに、文末詞デ（－）をともなう質問文に、疑問詞が共起するものが増えているようだ。H.22の＜疑問＞と判定したものはすべてが疑問詞を伴う。伴わないのは否定疑問文「～ジャネーデ」の２例のみである。また、使用者もH.22には高年層だけになっている。このことから、文末詞デ（－）の＜疑問＞の意味が薄れ、疑問詞を際立たせる（目立たせる）ほうに焦点が置かれるようになってきていることが予想される。

３－２．＜告知＞の場合

表１、図３の＜告知＞には下降調がいくつか観察された「キッチェ　カイリャ　イージャネーデ。」（S.30高年女性）、「フンナラ　イージャネーデ。」（S.30壮年男性）、「ツキヨデ、コンバンワ。」（H.22高年女性）である。前２つの例は「イージャネーデ」という同じ文末形式を持つ。共通語の「いいじゃないの」とも「いいじゃないか」とも訳せ、「いいじゃないか」と考えれば、形としては＜疑問＞に入れるべきなのかもしれない。例６は録音を聞いた限りでは「ツキ」が非常に高く聞こえる。そして、デは一気に低く聞こえるが、ピッチを見てみると、低いもののデは下降していない。直前の語のアクセントとの関係で、下降調が実現された可能性がある。

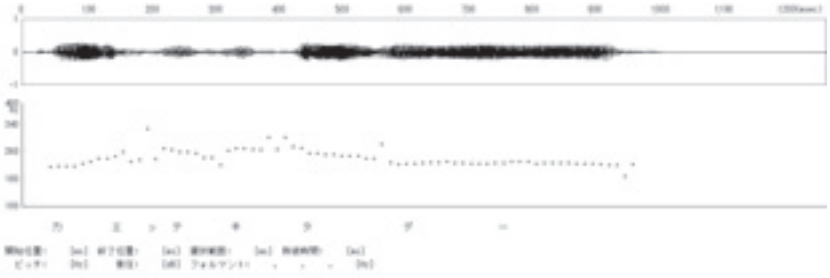
例６　H22. 中津女性　高年層　＜告知＞「ツキヨデ（月夜ですよ）」



３－３．拍内音調について

デ（－）が「平調」の場合について考えてみたい。＜疑問＞では10％、＜告知＞では20％が「平調」で観察された。とくにH.22調査での＜告知＞の「平調」が６例ある点は注目される。

例７　H22.中津男性　高年層　＜告知＞「カエッテキタデー（帰ってきたよ）」



このピッチ曲線を見ると、第１拍目のカが低いものの、後は最後まで平調である。このような場合、「下げないこと」が有意味であると考えられる。つまり、文末詞デ（－）が下降調をとると＜疑問＞になり、下降調を「避ける」ことが＜告知＞を示すゆえに、このような平調が実現されるのだと考える。上昇調の例も多いことから、平調か上昇調かは＜告知＞とは別の、さらに強調等の要素が加わった際に分かれると考えられる。

３－４．長音について

本稿ではデ（－）と表記してきたが、実際の音声も段階的ではあるが明らかな長音も短音も観察された。それらを整理してみても、現在のところ有意味な差は見出せない。しかしながら、傾向としては＜疑問＞の場合は短音が多く、＜告知＞の場合は長音が多いという傾向がある。ひとつには、「下げないこと」のためには「音を保つ」必要があり、それが長音となって実現されていると考えられる。しかし、例外も多い。他の強調などの要素もかかわっている可能性がある。

３－５．文末詞とイントネーションの関係から

郡（2003）[18]の「イントネーション構成要素としての文末調の音調」には、以下の記述がある。

文末詞内部での「疑問上昇型調」「強調型上昇調」「上昇下降調」「平調」という５種類の変化方向と、そうした変化が直前のアクセント形式を生かす形で始まるか（順接），直前の形式のアクセントが平板型で高いときには，それより低いところから始まるのか（低接）という２種類の接続形式という２つの要素に分けることができ、この要素の組み合わせとして記述するのが適当である（轟木靖子1998参照[19]）。

「東京語では１拍の文末詞は、直前のアクセントが起伏型の場合は５種類、平板型の場合で10種類の区別が可能」であり、さまざまな組み合わせの可能性があることがわかる。しかし、同じ文末詞でも、訴えかけの強弱という点によって順接になったり低接になったりすることがあるようで、その分類は現時点ではかなり難しいようである。また、文末詞が無い場合の文末イントネーションが一定の機能を果たすことが明らかにされているが、文末詞と文末イントネーションはそれとは別に「固有の音調を持っていると考えておくのが妥当である」との見解が示されている。

当該方言の文末詞デ（－）も、この点について精査しなければならないが、それには当該方言

のアクセント体系を見なければならず、現在はアクセント調査の準備を進めている段階である。

４．結論

文末詞デ（－）の＜疑問＞と＜告知＞の使い分けは、文末イントネーションによってなされている可能性が高い。すなわち、〈疑問〉のデ（－）は、下降イントネーションで、〈告知〉のデ（－）は、非下降イントネーションで実現される。中津市北部方言デ（－）を用いた質問（疑問）文のイントネーションは、鹿児島・熊本・長崎方言と同様に、下降調になることがわかった。

今後の課題としては、直前の語のアクセントとの関係を見ることで、例外とした事例の説明をより詳細に行うことである（３－５.を参照）。ここでは扱わなかった「ソーデー」をどのように位置づけるかも、今後の課題としたい。

【付記】

この研究は、科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ））「言語生活50年の変容－大分県方言談話資料を比較して－」（課題番号21520473、研究代表者：杉村孝夫　平成21～23年度）の研究の一部を使用しています。

この調査に関して、多くの方に御協力をいただきました。お話しくださった方々、調査のお世話をしてくださった方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

註

1　ここでは「意味」という語を使っているが、モダリティ（話し手の心的態度、話し手の意図）も含めた広義の用語として使っている。
2　松田正義（1960）『方言生活の実態』明治書院（79～81ｐ.）
3　１と同書（219ｐ.）
4　九州方言研究会（1969）『九州方言の基礎的研究』風間書房　1991年改訂版
5　糸井寛一氏執筆分
6　男女とも当時20歳　ｆ：女、ｍ：男
7　秋山正次氏執筆担当分（438ｐ.）
8　大分県総務部編（1991）『大分県史　方言篇』　小野米一執筆担当分（327ｐ.）
9　松田正義・日高貢一郎『大分方言30年の変容』1996年　明治書院
10　大家慎司『中津地方の方言　ふるさとのことばとの出会い』2003年
11　＜＞で表した内容を、意味ではなくモダリティ、あるいは文の機能として考える立場もあるが、本稿ではひとまず広義の意味ととらえる。
12　松田正義・糸井寛一著『方言生活30年の変容』　1993年　桜楓社　脚注８の内容と同じ音声資料。
13　松田正義・日高貢一郎著『方言生活30年の変容』1993年　桜楓社　脚注８の内容と同じ音声資料。
14　基盤研究（Ｃ））「言語生活50年の変容－大分県方言談話資料を比較して－」
（課題番号21520473、研究代表者：杉村孝夫　平成21～23年度
15　リニアＰＣＭ形式で音声データを圧縮せずに記録するＩＣレコーダーのこと。
16　文字化は、Ｓ.30調査は糸井寛一氏、Ｓ.59調査は日高貢一郎氏によるもの。
17　「イントネーションの地域差」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見―知られざる地域差を知る―』（ひつじ書房）所収
18　郡史郎「第６章　イントネーション」『朝倉日本語講座３　音声・音韻』2003年　朝倉書店
19　轟木靖子「東京方言の『ね』『な』『か』の音調について」『ことばの心理と学習　河野守夫教授退官記念論文集』所収。金星堂：ｐｐ.79－92